



29日 雨の合間のガスの中、勝手知ったる一の越しへ向かう。明日も良くない天気予報。いやな入山日となる。19 キロのザックがやけに重い。30日 雨のち吹雪き。小屋には、6 パーティー25 人ほどのオートルーターが足止め。自炊で少し食料を軽くする。1日 6時半風強く寒い中、御山谷へ。200m下は雲海で、雲上の遊び人。五色までは、複雑なアップダウンで装備変更がめまぐるしく訪れる。

ザラ峠の斜面ではエッジが、かからず50m滑落。五色が原で、一息ついたのも東の間で、鳶岳は、トラバースを試みたが、急なクラストした大斜面に出くわし、足が

ミシンを踏み出す。やっとのことで、スキーに装備変更し、うまく脱出に成功。しかし10人パーティーの1人がヌクイ谷へ200m滑落。走破を残念したようだ。越中沢岳を過ぎると、急で狭く複雑な斜面があり、わずか30mほどだが、極限のスキーを展開。その後も変化が多く装備変更の連続。キャンプ予定のスゴ乗越し小屋への最後の登りは、疲れきつ

った体には、つらい登りだった。乗越し小屋は雪に埋まり、屋根だけ見えており、入れそうもない。先行の3パーティーはテントの中だ。我らも早々とテントを張り、夜の用意をする。後続パーティーが、来ないので気になるが、第1ステージは、十数回の装備変更があり、テクニク・判断力、体力、山スキーのすべてが要求されるステージだった。



2日 雪が降っている。予報では回復は明日後半との事。風が強くなり、テントを補強し備える。1パーティー引き返し3パーティーとなる。午後7人パーティーがやって来、小屋の出

入り口をみなで掘り起こす。やがて雪から雨になる。夕刻、小屋に逃げ込むことが出来た。小屋の中でテントを張る。ガス・食料とも、先を考えると余裕は無く、節約に努める。ブランデーも無くなり、香りのみ嗅ぎ、満たされないが緊張でもっている。明日行動できなければ万事休すだ。予報は午後から回復、気になる。



雪とガスの薬師越え

3日 小雨で少し風が有る。予報は曇り気味の1日との事。様子を見る。2人パーティーの登山組の長崎山学会は迷わず出発。8時、雨はやみガスは風で動く。太郎小屋までの行程で、タイムリミット。単独行者に続いて我らも出発。7人パーティーも出発準備にかかり、みな薬師越えに向け動き出した。

シールとスキーアイゼンが小気味良く食い込む。高度を上げるに連れクラストが強く又斜度もきつくなり、北薬師直下ではアイゼンに切り替え乗りきる。風が強まり、ガスは動けど消えない。やがて雪も降り出す。スキーをザック固定にし、いくつかのアップダウンを繰り返し薬師ピークに立つ。ピークからの下降は、視界が無いので雪庇の確認が出来ず、スキーは危険と判断し、アイゼンでしばらく下りる。

やがてスキーに履き替えたものの雪質悪くスキー操作に苦労する。コンパスと高度計でうまく薬師峠に出る。もう占めたものだ。10cm程、積もったばかりの新雪に、つけられたトレースをたどって、16時半、念願の太郎小屋入りとなり、4パーティー・12人が、無事この小屋へ入れた。



ついに薬師山頂へ



4日 太郎小屋では我ら12人の縦走組と、神岡から入山の若いカップルだけで、夜は小屋の人たちを含め、盛大なる酒盛りになってしまった。翌朝7時半、快晴のもと、世話になった太郎小屋を後に、広々とした北ノ俣岳への穏やかな斜面をシール登行。長崎山学会と7人パーティーは時間切れで神岡へ下山。槍を目指すは、我らと単独行者だけになってしまう。北ノ俣岳からスキーの機動力を生かし斜滑降が主体で距離を稼ぎ、黒部五郎岳の大斜面の登りとなる。頂上近くでは、急なアイスバーンとなりアイゼンになって稜線へ。辻川は、レイマーのピックが心強く、シールとスキーアイゼンで、上がってしまう。そしてカールの大滑降を楽しむ。下りきった鞍部には、雪に埋もれた五郎小屋がありここでカールを眺めながらコーヒーブレイク。三俣蓮華岳への登りは、そろそろ体がバテだしつらい登りとなるが、変化が有り快適な感じもややす。三俣蓮華岳を越え双六岳につく頃は、気温も下がり雪がクラスト状になりだす。17時丁度に、おなじみの双六小屋へウェーデルンで滑りこむ。縦走組は我らと単独行者の3人だけになってしまう。小屋は多くの定着の山スキーヤーでにぎやかだ。なんだか下界に下りてきたような感じになる。



5日 昨夜は、山岳ガイドの織田氏を始め、多くの山スキーヤー達と盛り上がり、楽しい双六小屋の一夜だった。

今朝も快晴となり、小屋の前で装備を整える。スキーはザック固定で、アイゼン・ピッケルの出で立ち。これから槍に向けての岩と雪のミックスの岩稜を登る。オートルート最終日は、ただ一つの山に登り、そこから標高差 1500mを一気に滑る、シンプルだがジャイアンツな行程だ。

今日までの長い行程には、多くの苦難があったが、無事乗り越えてきた。最終日となる今日も、無事であるよう「慎重にやろう」と声を掛け合う。

登るに連れ槍がグングン迫ってくるが登頂にはまだ遠い。右手足下に、最終スキーコースの飛騨沢が、素晴らしい斜面を展開してきた。

あと一人のオートルーター・川崎市の川浪君は、若くてパワーもスキー技術も有り、いつも我らを引き離してしまう。今日も、遠く槍の肩に着いたのが望まれる。槍沢を上高地へ滑る彼とは、これが最後だった。

槍への最後の登りは、高度の影響で息使いも激しくなり、斜面もきつくアイスバーンとなる。お互いの安全を確認するように、辻川氏と声を交し合いながら、最後を登りつめた。

5時間丁度で槍の肩に到着。振り返れば立山連峰は、遥か彼方だ。



あのガスの薬師が、立派な山容を誇っている。二人でお互いの検討をたたえ握手を交わす。ここで、最後の1つのラーメンとクロワッサンを分けあって腹の足しにし、食料もガスも底をつく。飛騨沢の滑り出しは、それほどきつく無く、雪も緩み、快適に槍平小屋まで滑る。

そして白出出会まではブッシュが多く、楽しいスキーとはいえない。

出合いでは、林道の取りつきが分からず迷ったあげく、やっとのことで林道に出る。

飛騨沢で出会った、飛騨山学会の単独行者に、新穂高温泉から高山まで彼の車に乗。JRを乗り継ぎ富山へ。そしてタクシーで立山駅へ。やっとマイカーデポ地へたどり着く。

富山のビジネスホテルに着いたのは23時半だった。

オートルートを振り返って オートルートを山スキーの頂点として目標にするのは、山スキーヤーなら当然かもしれない。しかし決行を決意するには、踏ん切りが必要だった。テントを持って一週間の雪山縦走となると、中々決断できなかつた。条件となる体力・山の技術・安全スキー・判断力、そして信頼のおけるパートナー。加藤・辻川の二人に欠けるものは無い。これからの、体力低下のことを考えれば、今しか無いかも……。このような考えのもと決断にいたった。

オートルート山中での成功のキーポイントは、①鳶岳のトラバースをスキーで無事に切り抜けた。これはピークを踏むのが正解だった。②悪天の中、薬師岳を無事越えたこと。食料が無く、あと一日の停滞は出来なかつた。決して無謀な行動では無かつたと確信している。③北薬師、黒部五郎の急なアイスバーンの、シール登行限界の判断力。以上3点だが、要素はいっぱい有ると思う。又辻川氏は彼の記録の中で、この様に言っている。「入山2日目と4日目の停滞が、高度順応と休養のためにかえって幸いしたのかもしれない。又、装備や器具にもトラブルが無く、ついていたなと感じた。この様に入念な計画、周到な準備、ファイト、それにつきが無いと中々易く征服できるようなツアーで無かつたことを痛感した。結局、6パーティー、25人が挑戦したツアーであったが、槍ヶ岳から槍沢を下りた川浪君と、飛騨沢を下りた俺達2人の合計3人だけが、完走したことになる。」